KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

ホ 2
5598
2

門 ホ2
號 5598
卷 2

五 和
冊 天
號 土
函

○その結びハ。細緒の右の如き云。かゝるゝ[illegible]さゞまをたるがゆゑなり

△本トそのやゝの結ひ・こその結び・と云てハ、たゞふゝけ小其理り然るとき

て、その結びと云ハ云の截断もそ在るとなり、云ふる云ふる云など云

ふあまたの語多ぞのやゝ[illegible]からざる時ハ辨云へ連く云故其語のき

きび在ら〳〵ど、或ハこそに掛らざる時ハ、だ或ハどなど受けざれハ自

躰未ゞ語をなさゞるに似、さてだどと受ても猶其詞きるくしなく

[illegible]まるとも紀を、本にこそと云辞ありてそれ小ゝる時ハだどなど

[illegible]ハ、そこふて卽ち截断もそ云れと云がを係まそやゞて

截断の云ふと云ひを云ふるに用をしなり云れハ卽ハ[illegible]と

截きて止れるに同し趣となる、但うるさくれど、初学共為ふ狂[illegible]、妖
玉緒一卷十丁ふみ[illegible]こそよ〳〵おり〳〵ど。」と有如く、古文ともこそ[illegible]
掛りの云こそ截断となれるが當意なる其云をも、狂ぞどと文々て
次へ云ぐさをも打〻有ハ、又其格の有ことぞ、尓をバとてなくてそ
れよりおして爰に云趣をバ勿誘りそ也め、さて又彼辨云へ連くことバ
云ひ忘るゝと云へる毫の截断云と同云になる、たとへバ人の歩みゝて
未ぐ止るとハなきをも、後より第などを引ゝくる者有時ハ、それ小
かゝて行と雖もど、やゞて其処こ立留るが如し、詞の未ぐ止まゝず
次へ移りぬべきも、そのや伝文こそに引きそれにかゝりてハ、やゞてそこ
こ[illegible]て止り居る、之をなほ末の結びと云ふ、伝をも截断云と洩まて治
まるなり、然にいまもあるをを境の結びといへるハ、自辨その詞、おのれ
と治り止まれる有ふ、りとより之をきゝ〻詞と云ひ、ゞ友筵こハそ
易らん為ふ名目を設りて、彼将小然んともるると云ひ、已こ然るとも
云ひ、用云へ連く・躰言へ連くなど、玉緒・八衢小云るを、おの〻二字
づゝて其を差別もるれに、きゝ〻詞と云限りをバ截断云と云へる
なり、其截断小洩る連躰言も已然言も、皆本の辞そのや伝こそより引かく
りの趣こて皆摂して截断云となるなり、凡ゝ〻ゆる云語、この截断
もゝ延ハ、この行人の已れとにまれ、他こひられて小まれ、かゝ[illegible]
こゝ止る延こそ、足動ぐなれるがゆし、されバおのれと止り治り[illegible]そ

る語ハ、彼ノ代より帯とゝふるを得ぬなり、さるによりて之を尓
徒(タヾ)の結びと云ふべるものなり、徒の結と云ふはぶにきるゝ、詞と云へ
が如し、然るに尓こと云ひをと云が如きハ、かろらかなる辞(テニヲハ)故尓ヶの搭
ろくんとそる人の帯をとるやうなる力ハなく、ゆづゝ止る人のう
しろ帯にやかゝくに手をふるゝが如し、是と大方同じ程なる力の
辞に、尓をとどでだ省、さるから略図にハ其七を補へり、是らの辞(テニヲハ)
が本にありての末の治りハ人聊ひくとなけれども止り、又引かれても
異さまに動きもせざるが如きにて最軽(イトカロ)く、実ハえの結びもの結び
など云べくもあらぬなれど、従ぞのや何にかゝり、こそに引きて連
躰・已然の截断と轄するに類へて之をも亦えもの結と云なり、され

ば結びと云ことハ宗とハぞのや何又こそに應る詞(ども)等に付て云べきな
り、其(ソ)もを且くえそに付ても其結と云ことを云ぞぞやなどの辞(テニヲハ)に准へ
て云ことなるを、故に今も諸本にえをと徒の結びを云ゝて尓をはまでと何までと應へ
結ぶ事いはゞ等と省ハ誠に能云ひよく論したる者なり、但し新云へハ
とて至に去られぬもぞ咲けるにいろえかゝりし花ぞさかりなる「ふりにし里にも咲きけり古歌
らむ全く同じと通ハしてべからざるハ本よりなり、花こそ咲けれにといへるいくら言えへす
かゞ異なる不有あとを弁別まずハべからず、凡ぞハ事にまれ物にまれあるが中よりとりわける言
へ、えハ彼に對して此を云格、こそハ其とならねど殊にかゝりと簡別するなるから大きく
れにて、詳細やかなる味ひのあるをうまく心得るべき事なり、されど又「尋来れハぞ有
だにきく」今ハ「尋来れハぞ有とぞふきけ」と云言と同え、或ハ聞ける夜まで知
ほにゝ日忘れかいづれにもしてえんとえしるる次類もまゝあなるかにかくに慊くところ
えて休むべきとまぞあらぬや、

〇尓えの言のえ

△五月雨の歌にのこ多かしんより考へて、己ハ既(ハヤ)く思ひしハさえてきし
と云ことを五月の亦の名とそることの有にて、きゆるぎやよふし奏しし

なるゝかゝ小、そを[た]とうけハ云へるゆゑ云べき歟とも思ひ、又に考るに、此月毎のゝハ限らぬなり、古今秋「彩紫ぬときえめ山も。ふく風の吉ゝや秋を空ゝゝるらん」と有ハ、「きたもの山ゝた」の言と空もるなど狂有べ多れバ、小たの言のた」と云一条ゝるハうべなり、但しきこえを月名小ゝ云ハ、元捕条に「五月二あり」し毎元ゝ歌して、月の数加ハれる事ゝ山かゝくゝ[illegible]ゝあるゝ処や等も又ゝ元れなほ右ゝ云へる如ゝそあらん、

○[た]○濁るゝ小。隔ゝ絶るゝをいふと。味絶る状かひていふとの二つゝり。云云

△友鏡に将然言・已然言・と同ゝるハ、此処の云さゝなどを漢字ふせるのゝなり、将然とハ一隅ふよりていへるゝて亦ハ未然云ゝ云べしと、活語指南 初巻三丁 小云へるをゝべし、さてあゝゝる活用の語ゝゝ先

将然、後已然、中間に連用・連躰・其又ゝ中小截断云有て、此卯千言、万語の若り止るなるゝ、凡そ活用五ッにとゝるゝ其最中なる截断云を、連用・連躰・の二ゝゝて前後よりハさみ、さて其三ッをまゝ将然・已然の二ゝゝて初後小ゝ対ゝるゝ、漢語小彼正々堂々とゝ云らんやうに悲へる妙用のゝ、亦活指小云へるゝやし、さて此未然云を交るゝの中、[illegible]てだとなだと有ゝ、次下 五丁右 ゝも云ひ六巻 四丁右至五丁右へ 詳なり、されど其けぢめれ辨論なし、つゝゝく考小、多ハおぬぬゝゝれれの辞ハ自然の詞ふつけ、てつゝ[illegible]つれてよの辞ハ使然の詞を交るゝし思ゝるゝかくなゞゝちゝでよをやゝつゝ[てぬ]と、乃ゝゝでやゝやゝゝ[あぬ]との別のゝし、かゝゝバ古事記なる輾轉者を許伊麻呂毘氏婆

めるなど八、奈婆と云んぞ空しからんとぞふなり、其由八共巻の九丁裏ノ小詞りと云八、指出の歌に云へるかゝく、云にもゝゝぬひゞゝなりてたハいづれ云んさてはたハ[illegible]も將然云なるめ、已然云なる八者ゝなし、[illegible]れを八已然云なるさゞまりなり、然れどこの趣きハ既に一巻廿七八丁の繰分ふも云へるかゝく、確く定めハ云難し、万二十四二

朝なゝあゞるゑバりこなり。引之可、後撰伊勢物語あそぶあゆと

も放り。[illegible]ゞ是八大方同趣の語勢なるゞ、てたふ云てなりを受

うゝ、斯るも於少ゝゞ、されど大凡八上に云へる別き宵と云得べし、

○をた　こゝハをとたをぞた云云

△実さ精なり、さ精なるにつきて八、もの処・その処・こその処・やの処・そ、

名ゝ其例出ても空しうめれど、然ちゞく八物せゞとも准へちらるゝ

ゝなる故ふ略せるこゝぞいらん、但しをもふつきていた故ふしきま

一つゝ、奥廿七ト三に別に云べし、

○てゝ　こゝハたゝゝゝ云云

△てゝのゝハかさたなはまらの七つより、花さゝ宿ゝさゝゝ

さむ去なゝ去ぬゝも れりひしゝおもゝゝ母のまゝ雪もやとゝを

やどれと精ふ云へるゝ全く同く、未ゞ然らざるを云ゝなれバ、下

に必んまゝゝゝよけせて孫へめもの十一のてふをた宵べき理りな

りゝさて古奇ゞもをゝるに、廿十一の中まてんゝまゝゝとゞ多くまゝ

ハゝに多き精ふ品ゝる、那て爰ふ挙ゝる分ゞもの中に、之ふ遠へる

よゝ品もゝるゝあれバ、そのよゝ次ふ云べし、さて序に玉緒ゝハあづゝ

らぬゝなゞゝ爰ふ辨へ玉へきゝ宵、往くゝり　假名大意ハ抄なゞ在　抄なゞ在

しられたれども也」など云へるひがごとどもを、然（サ）と弁へぬのみならん、

近頃出たる古今集の註に、「てども」ハ「たれども」の意なるもあれどもまた「れバ」の意なる多し、「たも」との約（ツヅマ）りてなれバなりと云て、よき考を初て得たるやうに思ひ云へるハ、をかしきことなり、但し一たび見たる書ハ皆然ともはや得ぬことなり似る

り、彼万十九巻 右廿 山吹乎屋外尓植氐波見其等爾念者不止恋己曽益禮「など」を長歌より見れバ、此句ども二八十四句よみがたく、やむをえずなるべきかたかな氐波ハたれバにこそと、ふと思ひさなどより、件りの説を

けてハげにと思ひとる徒も有らん、謂れたる様なれど、こハ総てにをはのあるやうを志らぬゆゑなり、「たらども」の意と云へバ将然云、「たれども」の約（ツヅマ）りと云へバ已然云なるを、「てども」と云ふ将然云に云詞ハ、甚已然云ハただに「つれども」と云辞あり、かく云へど甚「つれども」を「てども」と云と様も云んか、それも用ゐがたきことぞ、抑此将然・已然の細やうなる疑（キ）ハ、友鏡又ハ略図 猶其（クハシ）くハ活語指南に図して云む

言ひてどもを能く考て暁（サト）るべし、「梅の香を袖にうつしてとめてども春ハすぐともかたみならまし」のてどもを、たれどもの約と思ふ類ハ、殊にいみじき誤なり、其「てども」など八将然云とみえども八有べからん、よりもいへる如く、「たれども」の約りならバ未をまじと八有まじきなり、さりながら「たらども」を約めて「てども」と云とハ思ふまじきなり、たらたるたれと用らくも一の辞、でつつるつれと活くも一乃辞なるを、「より」同じきにハ行かず、似てハ有、猿と人とを似てるとを有とハ云べく同じとハ云まじきがごとくなり、「たらども」と云と「てども」と云と似たらん、「たれども」と「つれども」と似たらんとハ云べし、今此も総てに「てども」ことをハたらどもといふ意と云へるハ、うへ見を「たらども」なりとぞ云べく、少なからじ、「いのちの意」と註せるハ、漢文に何、猶何と云風情にて、ひとしく同語と云るにハ非る故に、云ふべて知とてにをはのあひならぶを六巻の流流るの初に」なども云へるにて、元来世上の兼論とハ同からぬ社を可知

○秋きぬれ云 云强しそれも てども

△こもしハ「てども」と云まさて云ふ云外に餘意有て、已（ステ）に云へるがごとくなり、但し余意を含めて云ふまつるを、「てども」とハ限らず、「なども」にも又たど、ども例有る、うへに、たなども、てども外か、さたハまらなどを初と知る・そいもある将然云を言ふるなに限るでなく、已然云をうかる初にても余意を含めて云ひをつる例もなからぞ、初学たもまよふざれ、

○己がよハひ君が八千代に云く

△此てだハ「思ひ出ふせよ。」そもゝえぎ　と有て人よりハ「思ひ出ふせ。」
有方に从へバ殊ふてだの辞ゝり易き板ゝり、さるかも幸に有とゝなり、
○わゝを　てだ　木とをゝ〜ゞ川と思へなやかゆえなゞ〜にゆひて立し板
△此ハ「ゝどをゝ〜ゞてちん」又ハ「〜てくま〜」など有べきさゆに思ハる、
さ〜ゞ〜ハてだのだゞ　未然を云だと云説とゝり難きなり、芸ことよ
りて思ふふ、此分のてだハ、彼「ゝゞ」てん、妹背の山の中ふおつるよ〜の
川のよ〜やゝの中」と云へる奇のてん〜同ふえて、てゞを（此後の活のゝさだ　むまゝのごとき）
将然云とハみるまゞ〜、（此後の活のきゝ　ちゝみゝの如き）連用言として、それ文たるなれば、
此ハたゞ〜流るまゞき例のなゝと云へきことハ非る欤、一首の趣き然見
てゆめゝるこハゝ〜ゞや、芸をバ彼或説と惑ひてたれだなゝと思ひ

あやまゝと勿也、
○みちの奈有とゝふゝる名取川ゝきなゝり　てだ　ゝゝ〜かゝりゝを
△芸もゝゝ〜かゝりゝを」とあれバ、ゝきゝ名取てだ」のかゝる処覚束なき板
まて、ゝきゝゝりたまだ」とえれバよれゝゝくまも一ゝゝゝ思られて、
さハ彼てだ〜ハたゞ〜だたれだの二有とゝて、楫ゝ者を袖ゝふゝ〜てゝ
めてだ」ゝゞをもたれだの云ゝゝ云説も語まてゝる事とやゝに思
ふ人も有んゝなれど、狂ゝゝゝハゝ〜ゞ、仮又或ハ此ゝきゝゝりてたく
ゝ〜かゝりゝを」のゝまてハ、てん〜ハさて云て、たてのゝを、をバ此ゝを、ハつれ
のゝを、ハ吳まて、ゝん」と云ゝゞ〜まて、推（おし）量のゝを、なゝ〜云べき板（さだ）
まも此めゝ、即ち此書六（三）丁ふ「おゝ〜もかゝゝを」とて、其一種の例を出

て有、然もだ共註ホ「伴の家だのろそハ。こまをりてかまをおーしてかう
ちるところホおろそ」と有めく、そ「かま」をおーしてかりて「何〳〵ろそ」と云に
對しての「こま」〳〵るの花一つて有てなそ、「ほのうホを彩瑞乃柿ホ赤ホ
て表ハ赤ホろそ」と「彼表をおーしてうろ、蔦をちろき表乃ハきだの」と共場をりてみよう
那と、共柿をりて「それりをきあ
世ほ〳〵さうのちく〳〵表ろそ」とうの柿のちりのけーきをおーハうれるそ〳〵ひなる。
然るホ今共「名取川の歌をうるに、さるこもなれど、其説も通らず、
されどろそを恒のろそいきれバ、又てだをたもだとみべきに似て、そ
ハ恒より堂ーかゝじと上ホ判まるかくなるゝ、然〳〵バいうホと云んホ、
共家のろそハ恒のろそなり、てそハてだ又ハあ〳〵だ、是も彼「おゞれて」
妹背れ心の中ろ歳ろ」と云へるてそと同きてそなるとも云べき歟、
古今集に共家れ出へる者後とも、已に顕へる意の家なるを考ふべ、

○ろひえ「てだ」なゞさむやゝ秋ろ心ーにおごりーとてそ意ーろれ
△是もいきるる人まーおどのうそなきあり、されどこハ「おゞさむや」
と云へるやり向ろるやなるによりて、上ホ未然を云だりド有て、其意
より掛れる処てそと思ろれバ共初句なるハげふてだなるへし、かく
て共外ハこに出せる家ども、「見ゞあを」の家ハ未ホ「なゝき」と有、
「ゞよハひ」の八「ろひ出ホせよ」「ゞ意を」の八「出ぬ恋」「大そゝに」のは
「ゞまろそむべき」「たゞ形〳〵じ」の八「くゆかゝろ」と有を能考ふべ
し、狂いたゞ、未然を云だりドのかくる家ろ有てハ、てだホ限るにあ
らざれバ、家をそても其外かさたなまらの七つ、又ハ一段活のきに
ひみいおの六つそても、中二段活のきちひみいそみ七つそても、又下

段活のえけせへ終へめえまゑの十三をも、行もも将然云ふて云へ
るを文てのをすぐにーありせバ、そゞ末ハ必んまーべーよけせて
れへめまの十一音をて意をる処有と知べし、こハ序に云意なり、（終はえや
もくいもゞ将然云を文るをハいつをも将然を顕をんまー、りーくハ希求の詞ども
照応をるなり、それ不変りくる格もなきゑハ行へねいゑなんえの実例と云得てよりん
△爰に序ふいをんをとてをとハ共ふ今より後を云なれど上ふも
云へる如くなハゑぬめるぬまと活く辞なるを、万葉集中をりく共
ぬふあつるゑハ去字をかりり、又てハつつるつまと活くなるを、この
てゑハをりく而字を當たり、准へてそのつるつまも而の字の意バ
をふひつえも用ひもをべく、（波先三十丁合せ考べし、なハ去字の意なへを忘れ
ぎて、そを用ひもえもをべきこと〻ふ、それゑつきて又傍論をら

右事記傳十巻十一輾轉を許伊麻呂毘氐婆とよめる処のと止丁ふ云
へる如くまて、かーこふてハてをよりハなだの方こそ豈ーかーめーふ
ふハあーぞや、凡そなをとてだとこの差別ハ古き歌文をよくみて
こゝろとゝるべし、語りハとけやをうーねど、よく服ふ味ひえれバ、
自らにその意紀者とハふひえらるーりのぞ、ゑれどもそハりと
細やかなる処まて、をでふぬるとつるとをハ古書どもの異本ども
校をれバ、妖本と彼本とかゝみふ吳りてをゆるをし、時々ゆるなり、
（紫式部日記）たゞ形〻じとバりたくくひをゆるゑ
△此奇かの式部家集まてハ三の白〻ひをう手と云ふ、その方ゆて
やをき板なり、又序ふ云をん、妖ふハ孫女の名ようけゑ法しそまきの戸口
ふたくき侍つぬゑ〻人の式部ゑいひーに差へるなるを、妖よゑ

六左

の分ゝて、上の条ゝいへるゆゑつゝのことを忘ふべし、
日記ゝて八つゝかなる所りの、条条ゝ八ゆゑゝ有なり、
○まゝかぢ　あゝ八下に出又まゝといふ例ゝ。
△ゆゑに然るゝゝて、此例奇のゝなりゝぢ、字数定れりゝもあゝぬ文
章ゝても此例格八日ゝなり、件取物語一「たつを捕へたゝまゝ」八事
もなく条八かいせられるまゝ」ゝ有如き、往往くの書どもに多なり、

七丁左細

○こゝゝ条取のゝぢゝ云ゝ日ゝ格ゝ
△こゝゝ、「こゝゝ八条取云」ゝ有りんを、甚八文字一ゝ脱ゝるなめり、

八右細

次の八丁初行三行十行
のゝ日ゝるへきなり、
○まゝうだの部ゝ後於ゝ云ゝ
△爰ゝつゝ出たる中ゝ「なりせぢ」のせ八、佐行変格活、又だの又八麻
行一段活、孫だの孫八奈行下二段活、てだのて八多行下二段活ゝて、
いづれも皆将然云なり、又「みてやた云ゝりゝゝいひゝた」此八たゝ
渭らざるゝて、ゝ変るゝ八ゝ去のゝて、彼ゝきゝ右ゝゝと活く詞の連
躰云なりゝて又まゝうだ八、まゝくまゝゝと活く云の已然云なり、さ
きバまゝうだゝ全く日じさ侮又八忘うまゝぢきゝゝなり、中ゝも「いひ
ゝた」ゝ云ひさゝゝる八、彼二巻一「ふりる後於四の「ゆきめるゝ」川原の
雪ゝ有りぐゝ水をち方人の袖の又ゆゝ」と上ゝ及る「ゆゝるた」ゝ日
格ゝて、上ゝ及る処のなき八、いたゆる云を八含めて云外ゝいひのこ
ゝるゝるゝこそあれ、「又ゆゝるた」も、「ゝた」も、連躰云をたゝ交たゝこ
ゝろ八ゝぞ日例なるゝて、せだ又ゝた孫だてだ八皆将然云を交ゝ

なり、用ゐだりゞ乙ゝ、この已（スデ）小然るを云へるだと、未ゞ然らぬ文さに然んとするを云へるだとの差別をえべし、誠やまゝゝでハ已然云を文さるだなりと云る八、状詞のうへまそのてなり、されど状詞ハ其体全八、将然云なるゆゑ小、まゝゝだと云ても狂行未のてを語るゝぞあ

る、活語指南小、書射の真行艸小さゝへ云へる疑考ふべし、誠や状処小いひたてて言を爲くめなと」とゝ云る八必くめなと」のたの脱へるならん「さを」とあれぞなり、

○まゝせだ　こゝ八まゝせだ　ゝ弱まりゝ云云

△まゝせだの約りと云八室ゝじ、状八まく。せだの省（ハブ）り云ならんと上野人守村の云おこせゝるぞ優き　活雑三編小詳小せり、山口栞上巻七小云ゝてゝゝも八謬なるき、但ゝまく

即まゝゝと同云の連用の格なり、まゝ八截断と連体とを兼ぬるたゝらきなり、されバ語忘りゝ一方、まゝせだと云てぞ」と云るもふつ小関えぬゝ地八せぬなめれど、解釈し

てゝれバ截断言連躰言より せだと云つゞけらるべき格文小なしまく

八玉より用ゐへ連く云なる故せと云用云へ将もるものなり、助てきせ

た彼佐行変格小志（連用）す（截断）する（連躰）すゝ（已然）せよ（希求）と用らく語の将然

云なり、故小だと云辞ゝて文て、せだと云ひて、その未をまゝ、或たべ

ゝりゝるおどく　即玉緒状処小みえたる証奇どもの如　結べるとなり、さて其せへつゝるまく

のくの省りて、まとめと云たるくとハ、いゝまくほ」と云べきを生りな

ほゝきハ命なりゝ」とよゝ、又「えまくほ」を「えまほ」、関「のまくほ」

を「きゝなほ」と桃小云へる例いと多うるてなり、かく解釈ゝて後さゝ

に思へバ、玉緒状処のと今云ゝ吳るに渉るが作者の忘なるて「こゝ」ハ

まくせだゝ弱（ヨワ）まりと示本ゝハ有しを、板下ゝ、くをゝと読ゝ格て

書き忘がめ、なるユハ非る狡た思もるくなる、活雑(七二)の漢籍訓ハ欲(オモフ まネク)を条に含考
ど云る類多くるも原く而の語例有てに也、漢籍訓のしハ別ハ和読
語路撒ふつだ〜まれ、

○ちにまも〜くいたざるハ云云

△上ハ云へる如く、未然を云だの末ハまも〜と云てのみ多くる、恵ようその
理りなれど、然りとそまも〜ハ限るにあ〜ず、爰ハ引万十五の歌くたう
りこひんとかひてもも〜ませだ の末を、妹をだ又ぞぞ恋べ〜りる歌と
云へるハいまやるべ〜と云ふの活きのべ〜りまて恋〜たるなり、ませだの だハ上ハ云
へる如く、将然云を受る普通の例のだなるを然るだのまハまぐて、
んまも〜べ〜おぐく結ぶ例なるこ、然是玉緒三の五丁已下考て嘆るべし、

○ぬハの言の孫だ

△已然言をだと受るこ、連躰云をこと受ることなれバ、り〜我の

けぢめ有へきハ定まる理りなれど、已然云をだと受るぐやうく連躰
をハと受るこ云通ふさまなる其類例少くぬ詞づひなり、万葉十
巻 ふ繁こ亟白義のこハ云もいでづ〜思へたまの志げく〜思ハ初
ふ はなり、又月十七、学ん今ハなうんとこ麻氏婆かをみ枯ひき月ハ
へこつ 是ハ かまつハ なり、又貴之集、かゝ衣新くこう年なれだ人
ハかくこそ有まさりけ 是ハ年なるハ なり、月書 ハ保きやどに
ひもた年毎こ花の色ハ綾くざりける 此ハあるに なり、又みー人もこ
ぬやどもれだ橘を毛もかもこ今ぞちりける 此ハなるハ なり、形姿
集に、友笑ん志ぐく日毎ハ有やけれ一人ん云にありやく
こハ有りやくに なり、近くハ古今哀、茶ちまるあのまにくあんバ

山ニハ雲もなく嵐ニみだれ」こそ「来るニ」なり、又同秋、「桜ちるこそみだれ
をれバ河し川の山下さよみ志らぬなくらん」また「ちる心」なりかゝれ
ど九ての活語どもの已然云をぞと受るに、連体云をにと受る
と似通へる意の詞多しといへんも可欲、七巻十三の係分見合べし、

○
[毛]

△毛ニ亦の字の意なる有、またハだニと云へるに大かた同じ意ぞへあ
るなり、此外猶く證あれど、まづ此二つを引きて意得玄べし、あくす
「動かぬ云ニて結ぶと」とて引る歌の中ニても、新十七「花なくして云こそ、
ろ結おく[毛]みよし結び」のとハ、だニの意、其外の田首なる八亦の意
のなりと定也、次々係られのとと云へるを皆意つけて辨へらるべし、万

葉十六十「心が袖ニふりつる雪[毛]流去而いもが手本ニいゆきふれぬか」、
是らハだニの意なること殊ニたしかなり、「ふれぬかハ「ふれよかし」の意なればだニもといふべし、七巻二十丁廿一丁ニ、ぬかぬかとをあまた引るをみるべきに、頼ふ意のぬかの上ニ
ハ、多く此だニの意のと有、されど一むきに必然りとハ云難し、万十六十六「心かせこハちや[毛]こ[ぬか]とまつらんを」又施頭歌十七丁「よわくる月八子[と]
出[ぬか]と」などのとハ、うちつけニだニなりとハ云ひがたし、されどそ
れハとく云ひりてゆけバ意ハ一つに落ぬめり、
○△とをもぬる格より「○んの意のと」のあまり、今一つ、○と一つにて
意ハと二つある格」とか何とか標して、今一つ又此を加ふるもよかんかと
思ふ条なり、於遠十七新秋「水のおも結ぶく淺くもえゆるらぬ紫の色

や渕瀬あるらん」（おかるべし）と云へる如き色なり、（你ぐも淺ぐもとを二つおくべきなるなり、）又茅埴三卅二蟲爾鳥爾毛ゝれハあるなん」と云へる毛も、衷ふもゝ毛ふもゝ」と云べきを、二つのもゝてきゝせゝるなり、されどこハ「淺く你くも」などゝハまゝゝ矣なり、（さて又これと似ゝる勢ゝそ、もハ二つ有て、それと連る今一つの辞をハ、ゝ云ひて二つにきゝるもゝ有、奚之集下に「もゝ茅も花をもゝをれるゝをえま向の山の神もゝるらん」これと「をもをもゝ」と二つ云へゝるゝろ有、）

○んのをゝ

△千四のもゝ千五百のも、「えせんきゝうせん」とかくと全く同意ゝそ、せを」と書ゝるゝても有んゝ、さゝハ、んと今ゝくハ、「ゝむ又ん」の形変もゝるなゝるゝハ誰もゝれるゝふて、即古き年の路色、彼をゝるに、「ゝ」をゝ「ん」と書ゝ類少ゝゝそ、さのゝ古しれなき板下かきのゝけるゝそ、今彫りまきゝとある蜻蛉日記ふもゝゝ、「ゝ」をゝんと書ゝる処多ゝるなどよゝ思ふふ、んと今ゝくを「ゝ」とかきも落つらん由をも知べきふあゝもゝや、若ゝづむ」の字も猶さならん、（或云火爇す」を「とんす」と昔を「ぱゝ」とかゝるんハ、ともふもゝなゝもゝ毛なゝり、さ毛を㋝㋕両音に用ゝるなゝりと云へり奈万之奈下巻に炊あゝとハ具さに云ゝり、）

○さてを　かゝく云云

△炊ゝとハ玉霰十七丁ふ詳説あゝり、往き見べし、（「ゝても世ふなゝらふべゝもゝゝゝ身のゝりの奚をいゝそ話をん」と正行楠氏の詠れゝんなゝど、秋ハあゝれなれど、初匂けふ賤し、）

㋝序に云ゝん、ある書に「よゝりゝぐゝ」と云ハ至ふ對ゝて云ゝゝなゝり、ハ亦字の字なゝり」と云へゝるを実に云ゝるゝとかゝと問来ゝ人ありきゝれ答へゝらゝくハ、「よゝりゝぐゝおゝふゝゝゝ」ハ乃やゝゝぐ云」の字なゝどゝゝゝ

ゞにさいちんも空うらべゝれど、結宣集五「秋りんゞ〜かゝりゆえうさる蚊を火とうるる人をよそへてぞうる」蚊を火のなれハをに対して

と八ゆえゞ、但光ハ考ひていもぐゞ色悪さるに対して夜亦意さる」〜云ふそ

それ1付てよそへに蚊きを詠るなるとも云べきうなれど為盛集

廿六八月十五夜「よもすゞ〜ゝてをぬさん天系こよひの月を雲なかくしそ」くろ類尚万紫ホ

もゝ

覚也 これら抜考ふべき也と云しと曾れ、夜ゞ〜よるハゞ〜よるもゞ〜なと云ひ

松くゆ〜ゆる詠め廣く八活語雑話□編了

○そ□かゝ〜ゝてゝるゝと結べるゝ云ゝ右いづもと云云 風雅十九云〜云ゞ〜ゝ云

△ゞにそ□と云てゝる□又つ□〜と云へる意ゞとなるべし、されバ俊成々集

なるも、うれをも風ホおふせつるゝを」〜あゝ〜を、うれをそ」と誤れ

るなるべく、菅家万紫の「くゝる〜ぞ」も、古今集によりて「かへる〜も」

の誤なることを嘆うぬべし、されバ光等ハ今少し云ひさゆもゆる

べゝれ、曾ゞ〜こゝに書ゝれバ〜そ、それ四系に写誤なゝ〜ゞ〜云

なゞ万紫などハもべて考へゞ〜かるべし、

○古四名ふ光でをれるゞかゝ□ぞ□云云

△爰のをれる」古ようかゝ有べきとなり、光につきて見ふに、遠境小

説奇をおれる」と考て其説有ゞよゝ〜ぬと、活雑 初編 五丁 1云ゝるゞ

如くなるを、鈴屋翁ハ考ゝてゞに光ハ考ゝて打れる」なること紙にき

らあたる人なるかゝにかうをのゝるゝ1ハ月〜にゝけるなるあり、

○ぞ□こゝを四ゝくるぞホ□を添ゝる之云云

△考るに、此ぞ□をのをハかゝ□をのを。の如く歎息の云あゝ、云少もな

くたゞ添ゝるものゝといとかろゝくゝる古今打聴などの説ハあゝゞ

と古今彩釈に辨あり、佳し、さて又今考るに、此そと爰にかけるハ皆問うけて詞のきゝなるを、此外に一つ、そとといへるゝ、甚未出る例の連躰云むとびのかりとなれるあり、万十八六、いろこせるふせのゝゝぞとてくゝこゝ君がこせんと我をこそむる」同十六

十　たゞそのゝうめの花ぞを久るの清き月よにてら数来る」毛ら

梅花毛

なり、此「たゞそのゝ」の奇と又合るに、上の「そぐむる」とこぢめゝる哥も、「君ぞ」といへるゝ。りゞの詰びこハうゝまで、「そぐむる」ハ於初句の「いろ」より二句のぞとへゝるゝて、甚「たゞそのゝむぞ数来る」いろこせるらぞゝゝぐむる」と初中後かゝりあふべきなり、さて此万十の奇文に誰

苑之梅花毛

毛りゞの上に曾りゞの脱るなるべゝゝといへる説ふゝて出せり、ゝる八十八毛なる伊可爲世流布勢能宇良曾毛許己太久爾吉民我彌世武等和禮乎等登牟流」とある

十八丸

曾毛に云合せてなりゝされ八十毛なる毛を毛のあやまりこそ、「物毛ゝも」と誘べき歟と云説ハ用らぬなりゝ、ついでに云ん、万一七右七行「我許曾者」とある「飛鳥井雅親卿真蹟のをえつゝ、加納諸平の語るに忍へハ件の梅花毛なども古年ゝも尚求むべしとそ、

○ぞや

△「神宮女房集」いろふぞや毛なのりそれよとゝ、ゝんふも古もくさとゝ古ゝ

乃えいもけまし」、毛らも円ゝ、此外ふ右の奇どもの如く、いづくいるゝ

いろふなどいもでいへるぞやハ、問ゝくるとハきこえゝ、只云ぞとゝ

居ゝるに、ををそくゝるふこそとゝ、ゝゝるなり、源氏帚木毛にゝ

ゝよをかゝきよそとえさゝめゝたるぞやと云へるなどを考ふべし、

○一つのぞ云云例あきむゞとゝやゝん。さゝめがゝくゝるん

△新古今の「沉人乃丸ハる」ふ「そ」のゆゝゝ。ゝ。ゝふひるゝゝをゝゝな

ぞあつく」と云へる本にぞハ「つる」の俗語に「なんぞの何ならん」といふと
同じくて、いくそのそとハかくより異なりと云べく、かくおかなどと云
べくハあらずて、そハ又別に一の語と云べくハ非るか、又古今集に、い
くそハくさらしをかえたり」とある、是も幾許(イクバク)・若干(イクバク)を幾十許(イクソバク)と
云へるものと見えハ此れるやうなり、さて八後撰十六なる「みこし路
いく[そ]のよに年をへる」と云へるより、万葉集の、「いく[そ]くさの
の千年ならん」と云へるまで六首の証歌なるいくそハ、皆幾十の
こころとさべきにやあらん、
○宋玉戸のあとみえバかりあるをよわすれぬ人乃かたふ[めぞ]とふ
うつろをでまし伝来許り言絶えよかへる[めぞ]まる首れう乳

△……る二首も、めぞハ撰者しらかる心」まてハ皆なりむのをとへ
云云よりをめぞまる」などハけにおしきかりて何やぶむ言」あるにい
さくらかなれるハ、その「何やぶむ言」のなきならなり、これらの説々げ
まげによくいえれるをとぞ覚ゆる、
㊀序にえらび玉ん、此めぞハ大方連用言を受るなり「うちとこのぞ・
「めりりけぞ」なとを考ふべし、又辨言をもうく「何としかぞふ」まで
なり、さて語辞(テニヲハ)のうをもうく「かもにめぞとふ」の如し、此外にをを文
て「何るをとめぞ」といへるハ古くハをさくハ当らずて、近き世の人の前
に、誰かにか有らん、「何ならへるよしあるきくいをもめぞまる」と有しを何
との書にてつ、いかよぞやおおえつてる事なり、但し撰よく考ふへし

○詞新十七 万十 さくらひみつ [illegible]ぞ [illegible]ぞこもハ云云 [illegible]ぞ [illegible]ぐ後後
撰十七定家卿云云

△此「さくらひ」の奇ハ彩歌ハ出ざりた、し、ハ万葉のなれバ、是ハ七、
巻十五ハ乃ち出まて、こもり[illegible]云云といへるなり、されバ爰ニハまゞ出
まて、撰後撰十七定家卿ハ ちゐぬ[illegible]なぎくるゞきを身にそへて命ハさりぞか
きり有ん[illegible]と行ハ大書して、さて左の細設ハ「こもハ[illegible]ぞとそ
おのづゝ言りゝるのこゝ古今集よりこゝまゝニハをさゝ又えぬ格
へ万葉ニハこもくまあり。七巻ニ出すを見べし」と板ハ云ぐいゝゞ
ゆえやそからんゝゝニハ[illegible]かゝ有へきなゝもや、
○ちとぞ ちまハ云云 却てといふこと云云

△爰ハ引る六首の中に、古一なる「まゆ柳」の奇なる「ちとぞ」ハ都て
の心なゝしゝみるぞよ記、その[illegible]ちきよゝ八今将ハ是り是となりな
んぞる書、古今集新釋ニ云るの其一巻ニの歌の釈ハ[illegible]ゝ説をこゝ
知べし、かゝて爰に六首引る中、新十四の天の戸を云云うき人
ちとぞの句ハ、却てのことをふくまゞ[illegible]とあれど、是ハ狂を言ふ
くみるやゝゝもし思る考ふべし、
○そやハ何ハ[illegible]ぞハのそやく涯き[illegible]云云
△○ハ涯くてもハ近き由ハ、友続ハはもの方へ近つけて図せるゝ
如し、彼五十三段の活き詞ども八へくるこゝの、そや何とそをこゝ中間
ハある蜂なるを考へて知べし、かゝるこにてろとぐめてこん人もがちく
ろせる友続の図ありゝ、おれにるみゝゝ[illegible]

廿二右

○巻の終に云人の考るべく

△巻八歌次ぶ「きえも行べきぞえうの考文法の義むりあやしやし人の考へう」と例せるとおなじくらゐ八巻五の繰分ハ考るべし、人の考るべくふか「へと上へうへるこころなること、上ハ巻廿六々氏巻廿六より小云へるかめし、べくを」の乃結ひとハ云へうゐ、

○のこいさてう異なる所

廿右

△凡ての八、そのや何より八がうらうふて、はも陸小類ふにやゝ近し、友鏡の図し撮、爰においても能考べし、の乃字をむも宝の方へよせて下なる「考へかるべうをのせり、

廿三右二行

○のの結びさてなうばさて切さてる可

△一巻十六丁細小のの結び云云別ふのの結小出せり」と云へる八、このこ

なめれど、爰に出せる可八、巻首九に、彼十六丁に引るいなだのそゝとい小人の考きき」と云へる可より次このの結びと引証せる可等、十六九なる考の考ひて云へ「きより廿五右「少さ佐保山の考ひやり考」迄の数首の例証の如くはも陸の結び小もこその結小もあらで、そや何小類へるのの結びの可とたしうに証せられハせざる可うに思へる、殊こ拾玉の八、最の紬の考ありに考」とあれハ、こハ上三十二九の考」・の考こ」の可ごもを出て、伴の可ていづまを定まれる格まハ考づもこう云云と云へる如く、今も断り玉まふ」れ処なり、抑のの結こそ一首のまバ小て截こる可八、実にまれなる欲、歌仙家集一の十注九丁しかも我を忘らん下ゐも考の結ひもうへぞと考る」日ころ九を考こたるぬく、一その結りかるぬのこなこまで、五七句のまバこそその語

廿三右三行

のきろくハこれうもと伝吳の書どもに有、さて彼祝恒素なる「神の故ゝ日の」たやくまこもる〳〵ん」久曽地天の川雲たちこもるへく」と云へる詞も、板本ユ依て九ののゝ結びそなうばこそ切〳〵る」と云ふべう思ひしても有〳〵ど、然なる〳〵さりけり、あめと八活くれて秋なんハ恒のなんにけるべ、一巻四十三、六巻十五丁のよりこそ合せみてよ、さてこゝろもよの」のさハぬを」たる」思ひ祢の美路ささへやゐそふるらん」こゝ小ゐん正きこゝの例なる、但し此詞のこゝ一巻廿二丁ユハ」の結び」たる」の例に出せり、其ところのゝ分に審にせり、さて又件の「七日ひの」の詞も、結ぶ者んをのの結びふと云ひて云べし、

○古七ちたやふる神」のきりきん」法くかゝ示云云

△あは、きりきん杖倒〳〵」と云云の詞なれば、杖といふ雅語九あ〳〵れてハなく九、神のきりきんつく」と続くゝ云ふて、忍くきるくきん」

ユハあゝぬが如くも思たれど、家集一本、神やきりきん」とも有、ゆに應ぜれバふきるくなり、それ小准へるに、爰の忍緒げふ結弁ぜしりのとぞ思ふさて此のの結ふて、ゆバこそ裁るる九、一巻十六古小已に其断りの有如く、を証可げふ稀成とあり、其まれなるをこゝ小出せる中小、拾玉のをまじく引るハのぶらし、其故ハ一巻二十三七

」の」の処小、ゆをとめてとふ人ある祇ゐや免苦ゐやゝく弱」のをき

めざり」ゐる」と出せるに双ぶへきなれバなゐハこそきるくも」の」ゐる

と有を出さべきに、拾玉のハ」の」ゐる」なれバこハ彼三條の大臣の例小

ハたゐひて変格など云べノ、乃上二十二九小、金紫・新古・千六・なゐ四首

の」の」ゐる」の例を挙て、いづをを定まれる格ユハづも云云し云云

なれバ、爰に廿拾玉の字の、袖の　のありに乃を出れるハ、ふこれ
たかゝくゝと爰く断り立べきことを思はるれさて後云んいいな也
るのの結の一首のまらゝて截たるハ、上小出せる躬恒集に、入ゝこ
る　但し鏤板の哥仙集ゝそハのの結の証　衣ゝの乃きハぬも　ゝる
しゝハなゝ、その結び　ゝるのなれど、
が如きハげ小少き例なり、

廿二右

○のゝ　おかゝく書あまる字　三つゝそつゝもあれバ出さぢ　古今をかゝと云ゝ

△写ゝ書なれるゝをゝ挙とゝなゝゝバ、つゝに人の見てたるゝて、一の〜川
の心字の尾の右ゝりを　の　を出をも可ゝうゝん、但し一こハいひそゝしの
大なるの小修の云　も云のゝきりのゝ乃の日の云ゝもこれハ
ゝるもいひてゝしのなゝるゝ〜に共三そを挙なるゝや、
○風かゝよふ麻呂の袖の花のゝ小かをゝるまゝ〜の　の玄の歌の爰

廿

△此袖の乃のハげ小がの意なゝ、但しがの玄ののハ、ふ用云へかゝるなり、
されバ爰なるもの花と花へかゝまゝるゝハあゝぢ、句をへゞて、袖のか
をゝるまゝ〜と云延へ掛まゝるなりと知べし、がの意れのハいつゝても用ゐへ
連くゝと知べ志、但し掛が秀掛の秀、萩の花萩が花と枝に、のとゞとの互ゐまゝる、
○のゝと爲まゝる字　古十五吹まゝよふ云云　がハ又別なり、今いふハ雅ゝハのそれを俗ゝ言ゝがといへるをいふなり、

△爰ハをべて上へゝ〜りて其きゝるゝ処ハゝ、ゝ、とあるのゝの枝小もゝし
うど、よゝく考きハさゝうにもあゝぢ、古十八今文ゝ行まゝ出らん　作
の子の　うきふゝしゝ右けきよゝとハゝゝぢ、此奇ハ中の五文字ゝそのゝと
截たるゝとぞ見ゝしき、さて其のゝじゝりまゝてハうゝへ及て、らんと云ゝる
処ゝて截ゝるゝなるべし、されバ此字ハのゝと中ゝて云ゝとゞむる例なり

き、又のとゞまれるが上へ反りたるハ、必かなと云へるのこゝろと
ハ云ふまじきためしにも引出つべきを、さてかなと云へるへかへるの此一首
のなかまできこゆるがぬくなるハ多かるべし、古ニ式るしき証もなく
かな「宮の「おとゝのこちるむなしなく」ホの類なり、さて又かなといへ
でのの止りの的（アキラ）なき例ハ、実方集「ねをたよいえまゐらのつゝくといへ
やゆかん「思ふこゝろの」風雅集にも「思ふてふことハかくてぞ見えしけれ」ま
ごゝろざりし人のあはれの」又新拾遺集一本に「おとさゞに志るん事
こそかなしけれ「いきてかひなくきぬ思ふ身の」杉本ハ「の」字一本のなりきぞところハ上へかへりてあるなく
もバかなへかくるにハ限らざるなり、いづれをもまねびてよかん
○用の語より交るの

△ゆくハ用言にても、のゝ交るハ、必しも体言に志てのうへのこゝをなり、
そハゆく何れも連用言きこしちぬひみいをみ、又えけせてねへめえしゑ、「一段と中二段との用言」「下二段活語」
さてハ志る（シル・シレ）有、まさむ（脩）おもど（木）の二十四首に在てまて皆体言にいひな
しつるうへなれバ、用語交るのと云べくハ非るなり、ゆかん「の」いき
よひ・わかれじ「の」打来・ぐる人なし「の」宿、此体言のやうにいひたれハ、すべて組境第二段なる活語のかれ
にあさまに なといひ、彼ハ一段なる詞なるなれバ、ひたし・すれハかとのいひ続くすれ
むなとのこゝろ定り、そのすハこの玉緒七巻廿丁にありの又一つの格として引れるがともにあ
なあやふく「め」まさ「おなもしくゝろの」まさ「おりがふのよや」まさ「うゝろめの多の」まさ「惜めにの」
まさ「えゝなの玉緒の」なと見えるまでゆげし、されどおハ亦ハ寄」と云ひなせるもあ
り、活語指南初巻六丁「そえん「の」ひ乞いぞ志るまでのなど云へるも、皆かの八
小示せるが如し、
衛上巻十丁に、○活詞を躰言よいへるに云、古事記傳十七巻四、活く辞を
そのまゝにて躰言に云云、渡るといふ用言を甚まくにて渡る処とし

て躰云にを波てゝいひ云云と有是なり上にいへる廿四文字いい
れの用云を云へるも同例なり、螢。胸。蓬生なゝの類稀々此例ハ異なる所ハ別ハ云うべし、祢ての
あさけのものふるえも「ちりのまくひ小家路哉」「阿ゐきおり
ひのまくにはるもこん」などもそべてきちちハ乙みいてみ。阿行のいこ
くゝでも行のえけせて祢へめえもろ。阿行のえも也行。くゐ「おき」「おくおゐきこ
いこのこ行り、ハこの例有
て有り。めゝ活。不字ハ
のえ。むらむ。もそ志。学れる、の廿四字を、のゝ文るにその語ゝ
用云なるゞ多るぞかし、托七学十六紫の「ゐきのまゐゝなど云
へるをそこまるところ考へ合べし、さて又こゝ
なる引証の中、「こんやあじゃ」の「まこじ今ハ」の「ゐゝまゝうバ」の「あ
もゝハ打まゐせて用の語とも云雖きにあゝびや、一むきに祢語とも
云べゝらざれど、打まゐせて用の語と云ハかゝるに就くゝるの引ふ

て、八衢又友鏡底廼影につどくゝる語どもを云べくおもなる、古今集十六右
こゞゐきのまゐゝなどを六つ出せれど六つとも古今集ハ「ちのまゐ」と有
るゐどく金くはくゝれを古風の部と別ゝまそ出もべくハあゝぬことまり、
△此あるゝりへ、○下知の詞を受るの」と有て一条を出もべきゝ、さて其
下知の云と世ハいひ来るハ、略図にいもゆる希求言なり、あの希求云
とゐるせるゝでゝりゝ、暑氣をみてかゝもゝりのと云試らるべし、但一
さる語例のふる紀をふゝ号ひハ出がゝられど大殘二、大或すもゝもが
さゝとぎの附うその使ひゝさゝれて少れるそゝりゝ」あれゝゝらべし、
征伐せよの使と世ゐ、此類ひ狂考ふべし、
○のめくゝとゝ言ゝ行の
△此ハ文まにも有、古くハ出雲神壽詞ハ、白鵠乃生御詞能玩物委

文能大御心毛云「云」この初なる二つの乃能ハ、恒の云ひぐさ、しのの九ゝを、倭文能ののハ、それとハ異ゝて、のぬくの意ののなり、此類中昔の假名冊子ふもあり、

○一つ社の

千土大ゝ社高ゝる人すきてあきてよのはゝの「の」こや若おりつゝん、好古集人書とゝゞ「の」と書ゝ引ゝ所ゝふゝハ書れゝ神々ゝ社れまされり、

△爰に引る二首の歌なる「の」ハ同き中ゝて、又二つ小分て示したきなバいゝ、ゝ文え易からん、甚古ハ、千載集のハ「よのつゝの意ゝ」と、のゝ引の下へ意ゝと云ゝを入て又ゝ、好古集のハ「引のゝ」と云へるのゝ引を、やゝて書ゝと云語小変ゝへてゝべきなり、伊勢集に物木の侍なる

作ゝたゝむゝ物ぬゝと引ゝ歌ゝを、此の集ゝちりかゝらぬん物の花者の中「の」をゝとゝ云るべく」是ゝも同じゝいと古き処ゝて八、仏足石歌に八ゝゝゝゝ八つゝの「の」もあれどきゝひとゝの今の某し考かりゝめたしかゝ引り」と又ゝたるなど狂ありぬべし、又此の「の」を八いへるに、その句を互小ゝてあやなゝ物ゝるゝも宵、栄花物語月宴小ゝ、古今集廿巻云ゝとゝのゝへさせ給ゝて世ゝめでたくせさせ給ゝたく今まで廿餘年なり古への今の古き彩き云云ゝとゝのゝへさ勢給ゝて者ゝめてたうせさせ給ゝ」、古の歌今の歌と云云、又古き歌新き歌と云ゝゝたるをも、ついでに考ふべし、これもあまゝ例ゝるゝとなり、

△よのはゝのゝ「やなど云へると異ゝ八うゝねど、少しかゝれるやう小も思ゝえるゝ八、俗云ゝ八殊小多し、書籍のおくゝ、その持ぬゝしの本正右

○玉のをゝ分

○冊ノ廿四

ろ考て、誰某之と之字かゝるこゝ近古までなほ多し、是もまれなり。

「くもりしハつ祢のもあまど」よの法師のとや君おりみん」などゝ用ひ

云たへなり、されどかしかきれる様ニ思られぬニハいかゝぞ、さてかく云

のと同しゝふて、がと云へるハ俗云ニハ殊ニ多し、たゝしの同づゝひふも、

彼古今集尤の註ニ、をりゝ拾本の人まろがなり」などいへる類ひこ

つべし、考りがと云へるハ、古奇ニハのといへるより八其数少きかと思る、

其少き欠なゝ、奇によある例を一ついたゞく、万七冊「みしまえの江

の菰を考しよりたのがとぞ思ふいまぞかゝれど」と有など彼の書

籍のおくに誰某之と書く之と同きなり、彼好古素なる已がのゝ如く云へる

も俗云ニれわり考へ考べし、

㊀此わゝりへ今一つ、○一つ社の」と云て、七冊十六丁右ニ○と尓あふの」と云

へるを出してよりん、さる八其のたゞ古風部ゝかきるべくもいゝぬと

た、郎うしこ七冊十六丁ニ「黄之集ニと」ゝ云ひ、「古今八ニも」ゝ云ひて、秋芳

のとをに立出て云云」「白波のとをとまや」「春のとをにしてかるも」バを引

りるゆゝ、古今集の此奇ニも此ゝろのゝあるによりてなり、猶

後の奇ゝも有べし、古今八なる八、秋芳の立出てゝうもなゝとをに続ぬれ

のとゝれハ、ハの如ゝのなり、されゝなほ「ひこゝひやゝたらん」ゝ云意なるを、隔句にいへるも

あふの」と云ひつべき八、万葉のニ考てゝ思べし、「あゝ引の山田をうゝていなづま

のとをに秋ゝハあたんゝぞれりか」之 考 など、

○拗の 新十三 いせ拾遺 云云たのまぬ りの こひつゝぞゝる

△是八自らゝ云に近し、此例文章ニハいよゝ多り、枕冊子 春曙抄 を

うしきものゝひがおほしゝ 本一 ゝられるなゝもいゝバいみゝゝ考

廿八右

事〳〵しうもく覆〳〵しうれぬべし」など、

○のや

△万八廿九五月之花橘手為君」を仙覚本に、サツキノヤ〳〵しめる八佐ヘ
方〳〵成べし、其をバ「さ月の花橘」〳〵字句に訓ミ変ハなりく宜し、
うるぎど、さて此のやハ、やの終ハ出して方へきりの〳〵ふ由有、仙覚ノ廿二丁右

ゝり分合せ考べし、

○万葉に「妹がかゝるどいへる八躰の俤乃下なれどが〳〵文ゝ

△弁云なゞ〳〵ゞと文ゝるハなゝ「君が賢ち己が苦しちなどハき
こゝの〳〵こさ「おの苦〳〵さ〳〵ハいきゞ、もべて君己毋妹のたゞ
ひハが〳〵ゝけ、ゝはのきりさ「ゝふのゝち〳〵やうに、非情のこ〳〵非情

廿右細

のあハ、の〳〵のこゝけてゞ〳〵ハ文ゝぬゝや〳〵ゝふ人ゝうつれど、然局
りてもゝけられぞ、「人の行〳〵ち親の行〳〵さ〳〵ハ云べく、それを人が
「おやゞ〳〵ハ云ゞ〳〵ぞ思ゝる、さてこの妹がかゝ〳〵さなどを八万葉
に〳〵あれバ〳〵て、たゞ古風辞〳〵云條〳〵のそれくべき詞づゝひゝ
と八云まゞきなゝり、

△○ホ〳〵似〳〵るの」〳〵やうにして、今一条物もべく品ゝるゝのあり、
古今集に「志ゞのゞこえ〳〵女のおはくあつゝゝるゝ、伊勢物語八段ゝる
奇に「爰〳〵も人のゝたゝぬなゝりゝ、塗篭本なゝぬゝハ「人」〳〵あるなゝり、そゝら考ふべき
なゝり、業式部集ホ「ぬなゝりやゝふハち月のいつゝ〳〵いつ〳〵の雲のゝ行へる
に法も」〳〵有なゞ、元輔集〳〵ホ〳〵も、詞書に「〳〵人石ゝ友〳〵ちゞあひて」〳〵有
て、奇「石ゝ〳〵ゝ人のあゝ付はゝ医〳〵ゝるゝれ、この

も校本にて
もつぱなり、

○ゞなちをのが

△ゞをハゞ〜を〜をまるなれバ、かく云ひてハいゝこそや覓也、さて
このゞゞをの〜ゞ〜をゞ〜の〜ハ活雑三編に詳説せり、

○切る〜や

△きる〜やハきべて截断言をうゝる定りなり、狀やゝ全く意も同
〜〜て、連躰言或ハ躰語を受る時ハ、狀やをうへてかゝ云定りなり、
ゝ〜やを〜ゝるゝいつゝやをいつゝかゝ云へる如き例知ぬべし、神語を受る也
況の例ゝ
の次ひなり、さて用云〜用云〜の中ニハさまる時ハ、連用云を受ること〜
やもかも其つゞけさまハ同〜て、かハたくきこえやハやく後めきて
文也、一概ゝも然〜ざめれど、まづきゝ別るくなりたゝ〜ハ又やゝ
がめぬ、ちきゝちるらん」の類の如し、このゝ狀や巻十二ものゝりけ考、さて爰に切る〜
「や」の例ゝきて引る奇の中ホ、古十四書こゝる廉ぞなくゝるをゝな
べ〜おのゞきむゆのむ〜きゝ〜び「や」より、むきゝ〜れ名のゝゝゝきく

れ「や」と云へるまでの四首、さて新古今十五、おもひいづ「や」〜の〜を山のゐとつ松葉まゝ〜ハいつと忘もぢ」など中ゝてきれゝるを五首出ゝる〜ハ実ホ切るゝやなり〜ゝ行仕せて云ふべゝれど、後拾十一ある例れ木は〜そなが〜ゝそ持ホ八重ゝふのかそ布むよりハ「や」、同十六、とへと〜もおりたゝぬ八重ゝ山ぶき花ゆゑ〜ゝいまぐをうホらんと「や」、新古十一、雑波ぐ〜みどり花芦のぬ〜ゝ行まをうさぐ〜ゝ世をさ〜ゝてよと「や」〜宵、此三首なるや八一首のたゝに、あれバ、ゝ〜て一首の詞も截〜ゝまど、ゆめや・ゝ忘〜ぢや・など云へるゝハ同ゝ〜で、ゆめるや・ゝ忘〜め・や・ゝ絶に、連躰云を交け、或ハゆめえやする・ゝ忘〜ぢやおり・など〜、連用云ぢハ、連用云截断云をうあゝこ〜バなゝ、さて、きこゆハゆ〜のゝいへバ截断云、きて、ゆハ連用云、きこゆるハ連体云、芝れれの〜ところゝあゝぢなゝ

をも交るやゝて、なほつゞくやゝてこそみえゝれ、却て考るに、此三首〜やゝ云ひきてたる処ホ云外の意ゝ行て、こハ此玉緒五、右ホよそ〜ゝちむる格〜ゝ出せる例ゝて、こゝホ一種別ゝ標ゝて○やゝとぢむる格」ゝ云て挙ゝらんぞよろしゝるべき、雑波ぐ〜」の方に云ハゞ、ゝ忘〜てよとや・つらくハりてあきを」ゝ絶なる余情こもれゝ波こそ〜ゝちぢめたる分のさ波ともいゝ同〜趣なゝ、又此第後ゝ引証せる九首のやハ、たゞ問ゝ答るのミホ志て、受る処も必只きゝる語より忘〜ぢや・きこゆや・いゝこそ忘ゝ袖ハくちぬや・きく花や・いづや・ゝ人ぞたゞや・など云へゝ、猶云ぢ云外の意なく爰ゝて意も云もきゝるゝなゝバ、むかしたゞとゝ・ゝてよとゝ」ゝ有べきなゝ、九て

○玉のを分分

連躰を交るやうに、截断を交るやあり、連用を受るやうあるべし、略図を左右中と按して暁了せよ、

○（後廿）かけてゞ小ことゞ対ならべ。ゐひきやあん毎玄の花を又ゞ。八

△此者二句の。八後撰今本り。小の訛ゝ八非る乎、り訛なゝ八妄ゝ玄も哥のなゝなゝば

でゞ。ゐいふそやゆ

也ゝ云小及まゞきあり、

○件の句ととのやえ八一つの格ゝて。初学の輩ハ分ぬゞ云云

△げ小爰なる誨へゝてよゝゆ也、されど猶云ハゞ人のあゝろ小云ハ

いうれぬハなぜぢやい、小うふゆ者を云ハあゝへぬハなぜぢやい、ゐハ

ん方ゝ云ハあゝへぬハなぜぢやい、たそうれ小云ハあゝぬもあぜ

ちやぞ、道ゝぞ云ハやまぬハなぜぢやぞ、ゝやうに訳し入ゝこバ、い

よいよゆゝやをうべきやうなり、古今春なるあゝあゝバ云ハさうぞ

あゝぬハなぜあるぞゝあてみべきなど、猶少うゝば、

○（後拾十九）ゝゝあゝの中ふは云きぬをまつゝん人乃中にゐつ（やえ）

△上（此ハ巻二ふゐ分）小云へる如く、やゝうゝの大分け定り、ハきるゝ云を交、かハ

連く云をうく、やえゝかえゝのあゝも全く同じ、然小爰に引句の

まつ。やえハいさゝう絡ハ爰ゝ有、さるハまづ待つのつ。ハきるゝゝはぐ

くゝの二の活用をかぬるなれバ、まつ。うえゝもまつ。やえ云べきなり、

然るを句文のそこあゝまて、こゝハ截断言ゝて用へるりの爰ハ連躰云小

て用へるりのゝ云ゝハおのづゝゝふもあゝるべゝれど、をゝゝハ見る即

ちに八知きがゝき有、今此（後拾十九）の、まつ。やえなどのまつハ截断云の

方ゝそつゝへるりのゝ云ゝ、やえゝ云へるゝて知べきなり、元仁連躰言

の方ゝそ「まつ」と云へるなゝバ、かゝゝゝうくべきなり、彼 此四段に引る古ふ

ハあふ「ろた」の如し、抑きるゝと連とを兼ゝる 四段の活きと いつる ゐども くそつふむ

るハ、多くハ「あふ」ゝたとやうにうるゝとゝそ「あふやた」と云へる類ひを

多かゝるを、其ふ引れそ件の「まつ」やたを疑ふ徒もやうゝんゝそかく

まで云ふなり、

○もべゝ「ゑ」ハんのもゝゝゝ婦ゝそ。「ゑ」やハん「やた」の言ふ。云云

△げふ然るゝなり、此ゝ付て思ふにかきくけと活く語にむゝへて

「れバ」、「ん」ハ即、「む」ハきくの二つにあゝるゝ、「め」ハけふ歩る、「ゆけ」と云云ゝそいゞ、「ゆき」ハ連用云「ゆく」ハ

連躰截断の二つをかめるこゝバ、「ゆけ」ハ已然云なるを、「ん」「ゑ」ハ、「ん」ハ連用連躰截断の

三つをゝめるゝバ、「ゑ」ハ已然云なり、和語説畧図なる絲欄の通句東行の又不をそて知

べし、然ふその「ゆ」くゝ云を交て、「ゆ」くやゝ云と云ハ、語のとぢめにいた「ゆ」

る截ゝくやもあれバ、行ゝれの語へつゞきていたゆるそのや伝めやと

もるゝゝけれど、其きるくや、又づくやゝてハ語のとぢめに、「けや」と

云ゝハ千に一つも絶てなきゝなり、「ゆけ」やと云へるなり、又づくやゝそけ「ゆけ」ゝうけゝらん「ゆけ」ハ已然云なるを、「ゆけ」やと云ひてきれゝるハ、必下知ふ

云云ゝそ「ゆけ」の省もるゝきのゝなり、おもひきぶべゝゝだ、「ゆけ」と云ひ、それ工歎息のやをそへて

れバ、「んやとのゝいひて「ゑ」やとハ必云まゞき理りなれどいゝるれバ

ゝ「ゆけ」ん「め」においてハ、「ん」やゝと云ゝ「ゑ」やゝ云ゝ、全く其云同くなるこ

ゝの有うへふ、「ん」やゝ有べき処をバ「ゑ」やと云へるゞ殊ふ多きぞかし、

然きゞゝもこゝろを人ふれゝゝさん「やた」ゝ云へるなどを、「たゝらき

「め」やた」とハいゝゝゝでも云ゞゝれんゝ他を、文章に「いさん」やゝといへるゝ

を、「いち」「ゑ」やゝハ決めて云べゝゝぬなど、そのこゝろハ「ゆ」ゝ歎

故と云れなどゝ云くようおのづゝ云ひきくまる字りあるごと
くなるハあやしきことゝや云べらん、古今集序の終りなるごひ
ざゝめかもなども云ひさゝん。かものこゝろときこゆれど、名かも
と有なり、さて此名やの類ひ、此外ニハきやと云ことあり、次ニ云べ
き、活語指南に寡図の因示と云へるニ付て云云せ
ることゝを考べしめをべきの云ゝと云説も非なり、

十九

○古十九せごうも云さられだ云云花の名なきやゝ云ひきやハこゝる切るく辞ニて。
下のとぢめハやニかゝ〳〵ゞ

△此きやハ有あきやゝ云れやに限きり、成の字にあゝれるるを云きやと云校のことハなし、たきや
と云へるもいれど、それハ而有てあきやなれバ別なるに、あらぎさ
てこの有也の二つハ、ゑハ連用截断の三をゝゑ、るハ連躰云、きバ已然

言ゝとゝるゝ語なり、那て切るゝやハ必しも截断云をのゝ受る字りか
ていたゆる行くゝや行くんゝや云ふ例なるにのゝめれバ、あるや、な
りや、このゝいふべく、りゝよりさいつる も少ゝゞたある、おもゝるれど、是ハさいうなるゝ、
あきや、なれや、と云へるゝ多きなり、これハ次上の名やと此きや
と、その云ひさゝ日伝ゝと云べゝ、さて又ここに引証せるきやハこゝを問
うくるやうれこゝろ、此先れく二十のひゝ裏より廿一のゝ〳〵れゝ
ケ引ゝる方どものきやハ、歎息のきやゝとゝれてハいれど、今論サダ
むる格のゝハ全く同ゝとなり、但しその中ニハりゝよりなどきや
まて、必ずやの云ニハ那るいり、そこに云べゝ、
○右のきやゝ皆云云。やりゝをゞにくへてスきバんは也ゝ

△げによくさとせる訓へなり、但し志らける中、「身がらく人」…くち
らせる布なる「まや」よ紙へてそれども人もなき、「行きにけるを」あ
されいくよ時宮なる「まや」もさきん人の言つきもせぬ」此二首など
ハ、やをだに志てこころうる処はかなりハなりれど、志らしてゐる時ハ、
をかりの「人もなき」ハ「人のなき」と省べしといえまほしく、「もさきん
人の言つきもせぬ」のせぬハ「人の」乃のみもまゐるなりと云べきさん地
そ、そらハ別なることもりられど、かくまでも云ふハ、たゞ初学の
しめにさるぐしてふをそのこころえとなるべしと思ひ、又詞の玉緒
をさんに、おぼにえもさぐさびん今少しこころとゞめてきゝしるべ
きこともなりなんと思へバぞかし、但し上ハいく「何など」いへる下ハ普通ハ何と云てや とハをさきくいまぬ例なるを忘れてハならぬぞ、

㊀やぞ こハなるこのついでにいさん、「阿弥陀佛と十声称へてまさ
ろまん、かき睡りもまりもやぞせん」和語灯録五 二十八丁也、とあるのぞき、
その写誤などまや、考ふべし、
○慈威集 深あすおいぬる影を見るあづ乃鳴き声るふきこゆらん「やぞ」
△てはをその序ハ関からぬなれども、その序に云、此歌ハ一本に「だいし
くかけをこうつるかの鳴き声云」と有、類本に「ゆめをつかさ紙をちら
でくたつたのの人に」、さし又も一本のまり、と有よりこゝるに、此所を此
一本のかさよくきこゆるまや、辞ふつるに名をきかけくる例を、古今の「祝ひつるなど」猶ありん
○志ゝ川のみ紀のいとえまかしられどもみぐりに人をよせじおを「や」
△これ等の例ハ一つ別に○をやと標して、さる所どもをバ考証した

くはかしきことなり、かゝる文よとくに、「シカルヲ況ヤ人ニ於テヲヤ」など
云へるハ即此をやゝ、漢文訓(カラブミヨミ)のてにをハ別に語路撤に云へもど今ふることの
ついでまなん、
○もや云云七の巻古風頌に出きを
△此中、後於三のを引て、「吹りあきぬ月どふあ「もや」と云へるよ
り次との三をハ、「何もと彩ふ云に。歎息のやを添ふる云「云」と云る
如く、りとよりあをもやの意なくざるハ、これハ彼「夢たえぬるは。
やで学一とせま二度とだま来べきまゝは」と云へるけやの類例なるを、
後撰十三なる、「世中はうれりの身「もや」人云跡どふとかくふもきこ
えぬらし」と云へるより、いせお語の、「秋乃萩を裏日わきそくめ

のな「もや」(成者いせまな本)うすゑに思ふやちく「まっさるらん」と有を引る迄乃ハ首の九、かの
鳴く」と云詞まで見ゆれバ、「なく。や」と云べく、さそハ「なけ。や」と云へるとハいふ
く見なれバ、「なく。や」と云べき処まハ、「なけ。や」とハ又よくいたげるあと
なるに、有也(アリナリ)の二ッに限りてハ、甚「あり。や」と云べき処
をも、「なき。や」「あき。や」共いへるハあやしきことなりも、上の件又出さるんやと云べき理りなるをかや
とも云ることも数ありて此ことゝ上にもいへるを又つくゞく思ふに云ハ、いかで初学の徒まこと
く意えさせんとてぞ、さそ勢語の「ものなれや」真字本ま「成者」とあるようこれバ、その意
のもやゝ、落句の「ちへまさるらん」まのへまるのことそ、これえ、上ま十七右ま「あかずもめくま
引てさらふせる布な「れや」よをへてみれ「まし」とある人もあきし」など五首引る条ま並べく、
即ちやハを知りへてみま「ば」とありし証共云べく一々そろりハ思ふるれど上まいふ「何など
いふ語なきこまよりこきハ思ふ夢への二巻ふるまのありぞんを留めて考へ見るべし、
(△)●雑のや云云此処へ、彼三巻廿八なる○のや云云爾しき「のや」ぞも
とく花と云云の条ハ移し来さらんぞよろしかるべき、甚なハ、かの

のやのやハ狂くそへたるこそ、のりぐそ要まてハあるにより、のれ
弟に出せるもことゝりなれど、ちゝかろく云へるやのかさをりて、
やの紛へ、と思たるハさるやりぐ、のり下に限らぬこなこえたれ
だなり、斯く云ふハ、於遠十一我こそやゝぬ人こゝろるやまひきをあ
ふぎなゝでハやむくりなゝ」とゞ有るこそやハ、やまひきを」にかく
きるハ、たゞこそよりなるを、生こそに軽くやりぐをそへたるも
のときこえ、又猶や人・なぞや・などゝ云へる類も、皆誰〻云ひなぞと
云へるにやを軽く添へる例ときこゆれバなり、されバかろく添るや
などゝ云ひて、のやなぞやこそやゝをやの一の例と挙なん方、きこ
えやきまハりぐやゝ、

○一つのや　古々序なふたゝはかさて　やこのむゝこひなぐひ狂いとおかし
△こハ用言より躰言へ連くいひぐこハさゝみてあやなきかて、郎ち
ゐくむ　殘くも埴などなれバ、仏足石哥に、いちるや人こいませう
いたの上を土とふみなゝ跡送けるらん」とあるなども此類まそい
ろるる。人」〻云こゝぞおもハるゝ、さて新三、おのゞ法ふあひつなく
やゝ月やゝ神なゝ山の山ホゝくぎ去、玉六、同ゝとなき木神仏作
の寺をれホかゝもむ　やゝりぐり人ゝ位ゝ、こまゝらのやゝと上なるゝ月ゞ
ゝなゞゝいさゝらいひざるゝハもり」と有ハ、つらく此二首をゝるホ
ゝ八上なるゝ月ゞゝハ云ふまゞく、彼此四首の初初うぬ云ゝて話ふいたまる
ぶや」〻云へるつゝに入べきならんと思る、さるハかゝもむ　やりぐり」

又「なゝ」や云〻かゝゝぎさて」しかゝきるうて、彼「ち出るぢみ」や
玄のたゝ花など〻全〻目〻こゝ見もバたゝ、狂考ふべゝ、

○扨二つの間ホたゝむや云云

△むゝ義ゝも妙ゝ紙おどろうせる、まゝゝんよゝゝ云べゝゝげホ云得べき
ゝたゝゝ、但し爰ゝも即云て肖ぬく、や古くも稀ゝハ肖ゝゝて、討ゝハ
彼大徒ホ、「ゑや汚ちゑどを」と云へるなどハ、さゝゝもみゝにたくさるやうを
ゑ、和語灯録三の廿五ホゝゝゝる大胡実秀への御文に、ホゝもゐひ迫ぢせ
さゝん无智の人やさゝりゐるゝん女人なとの え昌せぬ云云念仏の外の礼
ねや読誦や後漢供養ちんゝをゝ云云こゝゝ味ふべゝ

○さゝべてかゝやゝ似ゝる辞にてやゝとゑハゝ云云みゝにそつひ

○玉のをゝり分

○丹ノ廿四

かゝゝ。

△万葉二巻三三明日香川明日谷一云左傳将見等念八方一云香もを君王御名
忘世奴一云御名、奴八方を一云ハ香もとせるられバ、かゝやゝのたゞひ
にせらるゝいと古くよりも有し例なりとハ云べられど、必これそれゝ
ゑりれゝるぞげホいと多ゝる、但しかゝやゝとの用ひ分ちハあれどそれ
が結びハ異らぢ、又このやかハ躰言或ひハ連用云又連躰言ぢうけ
なゞゝ、詞のきれぬ処ホ云るやかなりかゝ云ハ、さゝよゝうけぬる。「ぬ
ぬどういたん」とハ躰言を受ゝるゝ云、ゑハ彼、さゝよゝやうけぬる。
「ぬゝとゝや」と云に通ふなり、然るに截断云を交て截るゝ時ハ、「ふけぬや
と云て「又ぬゝ」「ぬゝ」と析ホハいたれぢ、又連躰云を交てきるゝ時

ハ、又ぬるゝとハ云へど、又ぬるやゝとハ夫めていまだるなり、おのやゝ
うゝときたやうに分きて肖ハ、其やうまて、詞のきれて問うゝる格の、云
なるやうなりと知べし、連躰云を受るも其やうにて詞のきるゝ小非
る、ハ、「ゝるや花の」とも「ゝるゝ花の」ハ互ひに通ゝせいもるゝなり、ゝるれ
どもやと云へバ拙くなる処あり、又ゝと云てハあどやうなるべきこゝる者、
それハ実によく心を用ゐるべきなり、さて又已然云をだと受て、それ
をゝる時のも、その云だゝくまそだハなくゝそのをりのも、やゝいつまふ
もいたるゝくゝり、右に引る万二の念八方・念香毛・の如し、彼「心さゝ」深く
そあてしをり「れゝ」ハ「をり」れだゝ」ハ云へゝく、それを「をり」れやハ
「をり」れバやハ云べきたゞひ、云をさだめて考へゝつべし、初ゝぬ詞

を受てめやゝハ、右に云ふ如く、「さよゝ」受ぬる「ゝ」今ゝ受らんなど「今」と
云ひ表と云ふ皆初ゝぬ詞なるをいちぢゝく、「きぬ」とゝいはんなど
のとも活指ふ長ゝ云へるゝ如く非云と云中に入へきなるをゝ、花を「今」やゝらん
百月の弱「花」とやゝらん白雪の「よ」やゝくゝき花やまゝ」るなゝに
あゝせみべし、然まゝども其所〳〵によりて、ゝ云ゝと云てよきゝとむや
と云ゝ巧なるゝのけゝあるゝハゝくゝもゝるまじきゝてゝかし、
○古科抄おゝえの巳乃者ゝゝぶ人のちゝくゝとがゝひ　ゝえゝ
△花ハ古二十〳〵ゝれど十三花、「さ」てのゝふおゝく初ゝ歌の」と云へゝる次
に出ゝゝ、廿巻ゝそハ墨滅の所に出て、「日〳〵ゝ有〳〵おゝゝその滅の」
と有、即ち此玉緒此巻十四ハ、古墨滅と挙たゝ、さそそこゝハ「まひめ

やと」と有、今爰に引るハ、あひ見うと」とあれど、あれも古今集ニハ
十三巻に出るも二十巻のおく墨滅ニそたるも　ともに、あひめやと」とのミある本有て、それよ
りんと思ふハむごゝろえふや、

○かゞふ

△妹がふ[illegible]ハこてに引る歌、くる。[illegible]などゝそそられハ、連歌云ゝ
くる辞なるを、くる。[illegible]まゞふ。[illegible]のるぷハ、又ハ截断云を受る辞なり
きれもてきも両用の詞有、
廿おもハる、そは七巻廿三ふ引るまゝ〳〵を云云かゝるつゞく。[illegible]秋田
かる云〳〵書もおきぬ。[illegible]などゝそそられ知るべきを、又そこに引るとあ
ぬる。[illegible]などゝそそられバ、狂連歌云を受るも古くよりのことなりけ
り、されバこゝのがふ[illegible]ハ速く詞ゝも截る詞ゝも附著する辞なり

と思ひ定むべきなり、巻をバ古今已後ハつゞく詞ふのミつけて云ふ
定まるゝ〳〵思ふべきまハ行〳〵じ、さるつゞきの自らにをさ〳〵ゝえ云
らゞハぬにこそ詞れ、の万なる声のゝる。がふ[illegible]などに倣ひて今も
用ひたもバとてなてふ有べき、狂雅話四編ふ、
△行の下ふおくかゞ[illegible]の玄処のゝろえなどいふもよく、鶏へ玄
べきをなり、二巻十三丁のゝりてけふ云へるゝをも考ふべきなり、
△動ぬ云ゝそ詠ぶ行の処ふ方りて思ひ出れバ、萩をうちゝ西ニ
ゝふく月をゝて[illegible]いくゝゝりぬ。南无阿弥陀佛」こハ拾玉五ふゝ也後成々のなゝ
○切るゝ行
△此類ひまてなぞやゝ[illegible]やゝりてそりて切をたるも有、源順集弐ち

汲しまつ釼代木ホいと忘をのたえそよゝぬハなぞや」ゝう

○なホせんホ

△此詞を、読訳をれハ二ホヨうる、一つハナニレニ　ナニノヽテ、こゝに引る後撰、なホ せんホへゝのみる矣をおりひきん」ホ速きて、こんの琵び

へ掛きるなど見なり、今一つハナニ、セウゾ、こゝに引る古今なる「ホ

ふきぞ枯かゝ又も家々なホ せんホ」と截、るゝれなる方乗五ハ

白がゆもてがゆもゐもなホせんホ」まさきる宣子に志ろめやをにゝ

有類、をべてきるゝ何せんホハ皆芸なり

○なホ一ホ

△之と次条なゝ○なホ一と忘かゝゝぞときこゆ、又六帖のなホ

「菓」を、後拾ニハなホ」ヨ、又朝忠条なる「なホ」ゝゝ袖乃めゝゝ

ん」を、一本ニハ、何ヨかえと有よりゝれバ、甚なホ」ヨも亦同意欲、拾

遺の「あゝゝしとなに」命を見ひけん」なども、なホ」ゝ。ゝもなホ」

ゝも、なホに。ともゝ、ゝらゝ、やうなれバ、この三つ全く「同意」せん

た云べきゝ侍なり、されど古今なる、なホ」ゝ。人を見ひわきん」な

ど、栄花浦々別巻「ゝるハ」ゝそうぞきたるゝめゝ南れりてヨたく

まゝゝりに条ゝこハなホ」ヨゝ」これハ何為ヨゝ」ゝそ」おもし」などゝハ、金ゝ意だへ

吳なるべし、又浦々ゝ巻にごきでんの女房ある祢ゝなホ」ヨ

こつらんなどいひ侍」と有などハ、あゝゝもなホ」ヨおりひそめ

ん」のに同意たゝるりのヨて、なホ」命の云云なホ」菓」なホお

りひきん」などいつれへも通ぜる歟、かゝくに「なふし命の」「なふ
〜巣」「なふ〜ころを」など云ひ、「なふ〜ろ」人をおりひわん」など
の〜ハ、五巻卅二より卅七丁へうけてにいたゆるやきめの〜」の一つと思はるれど
古今のなふ〜ろ人をゐひわん」も、友列素の一古本コは「なにゐふ。
人をとゐるなり、猶考べし、近古の俗書どもに、なゝ〜ゐと云て、何ナ
りのなゝ知巣なゝ知巣などいふぞきき
なゝ知巣なゝ知巣などの類ぞといふぞきき
○なぞを
△なハ何ナ字の意、ぞハそへて云コそ、やぞなども日例なめりされ
バなぞもなふぞも同く、又いゝそ。誰ぞ。など云へるも皆同ことな
るべし、その中たゞぞハ、色葉字コ、わかよたれぞつねならむと云

へる如くなるハ、あまゝハさえぞて、かゝる処ハさべて誰ぞと云例と
おもはるれど、彼色葉字ハ古き世の物なれバ、それのさえも古
き証とさべし、影響ゐてられバ、新古今十一、たれぞこのうわの桜ぞも
ちゝなくにゝの杉の森をゐぬゐる」とゐる、即この例なり、猶古くハ
万十四二十多禮曽許能やの戸たれそゝゐふゐろコふゐみコわ家世をやアそ
いさふゐ戸を」などさえゝゐ、猶七巻十五
ゐいつべし、
○それ　ぬゐ
△誰それをたゝのミ云へるハをゐくさえぬ桜なれど、我ハゐゝ。其
ハゐゝそゝそ、ま。ハそゝ辞なる例コよるに、誰もたゝと云ふこそゐゝな
るべゝれゝ、ちやくゝより見ひしに、古事記ふ、みりろコつくやゐ垣つき

あゝ〜多爾加毛余良年のみやゐと」とゐる多爾ハ、誰ホなりと傳
四十一卅八ホ釈せるをこれバ、げふと思定られぬかし、因ニ云、為ニ云ことを
仏足跡哥など
引えたり、

○祢ぐふ言のいゝふ〜て

△けふ「祢ぐふ言」のなめれど、爰に引る三首の「いゝふ〜て」ハ〜ぐ
如「行〜て」と心ひゝくるのミにて、彩ふとまでハいたゞきもきこゆ
るを、狂頭忘と云てよからんとハ、順集ニて知へきゐり、順集ホ「三
月をゐむ方のところ「いゝたし〜て」花をもつまゞ花の枝を袖につみ
つるはなみもおそうき」花を一本ニハ「三月をつみのところ」と歌、
「いゝふ〜て」花をつまゞ〜花の枝を袖にとめゐるはなみもこそゐと」と

有て、さてハ此「いゝふ〜て」ハこゝに頭忘のとハきこえざめれど、こハ
歌ハ一本の方堂〜かゝるべく、所ハ狂板本のまゝよりんと思ふ、さハい
ゝふ〜て」ハ何トゾレテの忘なり、さて下ニ小出る、祢ぐふ言のいゝで
云云比格詰びニかゝハ〜ぐ」とある、げふさやうと思ゐるゝを、此「いゝ
ふ〜て」ハ詰びゐ忘ちもんなるゞ、ドハざらんの約りなれバ、つまゞ」
も同例と云べきまや、後拾春上、君ふりてゐるさきさゝふ山里にい、
ふ〜てゐゝ去の末つゝん」こハドノヤウニレテなり

○いゝてふ辞のつゝひざゐまて。云云

△こゝの要論とハいゐられど、その序に云ん、彩〜てふと云ことを
バ、所なゝで文詞ホ用へゐるハ堂〜ぞとゐる、松屋の文のゐるべも

ハ玉義に
係てよゝ、ふよる時ハ、そのてふ[illegible]ようゝぬに似ゝる、玉ゝをゝ、世ゝ[illegible]不例ゝるをゝ[illegible]
る歟論も有、つぎに引べ、されど、但し文のゝるべ、そのまゝ唯依りまゝ依る
爰も其自説ゝもあるぬやうなり、

べゝゝざる故、中昔の文詞ゝハ、竹取物語ゝ、かゝくや姫てふ[illegible]たかぬまゝ人
と有をもゝべし、古き所ゝも、者をてゝ[illegible]りとよむなどなり、この
てふ[illegible]
乃 かゝもあれを[illegible]まれと云など、ゝひゝゝにべきまゝなり、これゝゝのこと
えゝゝべて又別に云べけれど、初にことゝゝられるめゝ絡り別くゝとゝる玉緒ゝこゝえゝる
造詣のことなれバ、聊かるゝもいゝんとゝるまゝにゝゝまゝ云ふなり、抑ゝめゝゝ或
ハちゝよなどハ歌詞ゝそ文詞ゝ非るゝゝ、文のゝゝるべにゝえたるゝりとハ、玉ゝゝれ四十ゝ出
たるを、其延ゝ但し多くゝも[illegible]てふ[illegible]人ゝ引ゝ[illegible]てふ[illegible]某と定まれる抑有てゝおたゝ
して云るハゝへてゝの例外といふ
然ゝてきまへゝゝくべきゝたゝらし、

玉緒漂分爾巻終

紫藍藏書